

## 15 慢性期頸髄損傷者への長期的なリハビリテーション介入が日常生活動作に及ぼす効果についての後方視的調査

自立支援局第二自立訓練部肢体機能訓練課

瀧本一真 石原理江 森野徹也 池田竜士 水谷とよ江  
病院リハビリテーション部再生医療リハビリテーション室  
島袋尚紀

**【目的】**受傷後12か月以降の慢性期脊髄損傷におけるリハビリテーション介入が、日常生活動作に及ぼす効果についての報告は限られている。そこで、慢性期頸髄損傷（CSCI）者における長期的なリハビリテーション介入が、Spinal cord independence measure（SCIM）の改善に与える要因について検討を行う。

**【方法】**研究デザインは後ろ向きの横断研究で、当自立支援局の診療録から集積した。対象は2016年1月から2023年12月までに自立支援局を終了したCSCI者のうち、ASIA機能障害尺度（AIS）がAからCで、入所時の受傷経過日数（受傷日数）が1071日以内（Tukey's Rule）の156名とした。調査項目は、基本情報は入所時の受傷年齢（年齢）、性別を、医学的情報は受傷日数、入所までの転院数（転院数）、神経学的損傷レベル、AIS、上肢運動スコア（UEMS）、下肢運動スコア（LEMS）、既往歴と合併症の有無、SCIMとした。メインアウトカムは入所時と終了時のSCIM合計点の変化量とした。統計手法は、対象者全体のSCIM変化量をWilcoxonの符号付き順位検定で確認した。次に、SCIM変化量の中央値で不良群と良好群の2群に分け、両群の基本属性をMann-WhitneyのU検定と $\chi^2$ 検定で比較した。最後に、SCIMの変化量（良好/不良群）を従属変数、年齢、性別、転院数、既往歴と合併症の有無、NLI、UEMS、LEMSを独立変数として多変量調整ロジスティック回帰分析を実施した。転院数は3回以上と未満で2群に分類し、SCIMの各大項目も同様の解析を実施した。統計解析にはSPSS Ver. 25を用い、有意水準を5%とした。本研究は国立障害者リハビリテーションセンター倫理審査委員会の審査において承認を得て実施しており（承認番号2025-066）、利益相反関係にある企業はない。

**【結果】**対象者の内訳は男性140名（89.7%）、平均年齢36.4±13.7歳、平均受傷日数428.7±191.3日、AISの内訳はA・Bが109名（69.9%）であった。対象者全体でのSCIM変化量は中央値13.0点と改善を示した（ $P<0.01$ ）。SCIM変化量に関する多変量ロジスティック回帰分析の結果は、年齢（オッズ比：0.92、95%信頼区間：0.88-0.95、 $P<0.01$ ）、UEMS（オッズ比：1.13、95%信頼区間：1.07-1.19、 $P<0.01$ ）、転院数（オッズ比：0.38、95%信頼区間：0.17-0.84、 $P=0.02$ ）、合併症（オッズ比0.37、95%信頼区間0.16-0.88、 $P<0.05$ ）が関連要因として抽出された。

**【考察】**CSCI者のSCIMの改善に関しては、年齢や上肢の運動機能がこれまで報告されている。一方、転院数に関しては、本邦の医療・福祉制度における独自の背景因子が反映されていると推察される。

**【結論】**本研究では、慢性期CSCI者における長期的なリハビリテーション介入がSCIMの改善に有効であることが示され、脊髄損傷者におけるシームレスな介入体制の重要性が示唆された。